

プログラム・ノート

沼口 隆

I 6月20日(日) 14:00開演

ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲第4番 変ロ長調 作品11「街の歌」

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)が1797年末から翌年夏にかけて作曲した作品11は、旋律楽器にヴァイオリンではなくクラリネットを想定していた。ヨハネス・ブラームス(1833～97)にも同じ編成の作品がある(作品114)というのは、今回のプログラムを前にすると、なかなか興味深い偶然であろう。作品11のヴァイオリン・パートは、クラリネット・パートと本質的に異なるものではないが、作曲者みずからが用意したものだと伝えられている。

「街の歌」の原語のドイツ語は「流行歌」といったような意味で、第3楽章の変奏曲の主題が、1797年10月に初演されて大人気となっていたヨーゼフ・ヴァイグル(1766～1846)のオペラ・コミックから採られていることに由来する。同じ人気の旋律を題材にした多くの作曲家たちの中にはニコロ・パガニーニ(1782～1840)も含まれている。

ブラームス：ピアノ三重奏曲第3番 ハ短調 作品101

ヨハネス・ブラームスは、ピアノ三重奏曲を3曲残しているが、いずれも4楽章からなる堅牢な構造を有した純粹器楽であり、楽器間のバランスを追求しつつ音響の拡張を希求している点などから、ベートーヴェンやフランツ・シューベルト(1797～1828)の系譜への意識を感じさせる。曲の規模は、創作のたびに縮小されていっており、その傾向はいずれの楽章にも等しく認められる。第3番は、室内楽作品において多くの実りをもたらした1886年の夏に成立しており、饒舌に過ぎず、さりとて縮約的にもなり過ぎず、魅力的な楽想が効果的に活かされている。辛口の批評をも辞さない友人たちから絶賛されたのは、簡にして要を得るような充実した書法ゆえのことだったのであろう。

ブラームス：ピアノ三重奏曲第2番 ハ長調 作品87

第2番に着手したのは、第1番 口長調 作品8から実に26年を経た1880年のことだった。その動機は定かではないが、熟慮を重ねた上での構想であったことは、ハ長調と変ホ長調で二つの第1楽章を準備したことからも推測できよう。後者は破棄されたらしく、痕跡は残っていない。後続の楽章が作曲されたのは、さらに2年後の1882年で、同年中に幾つもの半公開演奏を経て、12月29日にフランクフルトで公開初演された。

自筆譜には、さまざまな変更が記録されており、試行錯誤を重ねた様子が窺える。ブラームスのピアノ三重奏曲の中では唯一、緩徐楽章を二番目に配しているが、中間楽章の配列も熟慮の末の決断だったようだ。

II 6月21日(月) 19:00開演

ベートーヴェン：ヴェンツェル・ミュラーの「私は仕立屋カカドゥ」による変奏曲 ト長調 作品121a

自筆譜は1816年のものと推定されているが、同年の書簡で作曲者自身が「以前の作品」と明言しているので、改稿された可能性も高い。1803年にベートーヴェンの弟カルが書簡で触れている作品とも推測できるが、確証はまったくない。

主題は、1794年にウィーンで初演されたヴェンツェル・ミュラー（1767～1835）のジングルシュピールに由来するもので、当時の流行歌である。主題と10の変奏を、かなり長い短調の序奏と、独立したコーダで挟み込んでいる。

ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲第5番 ニ長調 作品70-1「幽霊」

ベートーヴェンが記念すべき「作品1」に三つのピアノ三重奏曲を選択したのは、自身のピアノ演奏の腕前、ピアノの機構の発達、書法の発展（特にチェロ声部の独立）などを背景に、先達では達成できなかった成果を示せると考えたからではないだろうか。すでにウォルフガング・アマデウス・モーツアルト（1756～91）によって礎は築かれていたが、楽曲の規模や表現力の幅に於いて新たな次元を切り拓き、ピアノ三重奏曲を室内楽の王道へと押し上げたと言って良い。

1808年に作曲された作品70の2曲は、交響曲第5・6番を含む圧倒的な「傑作の森」の中で、存在感に劣る面はあるが、同時代からも高く評価されていた傑作である。第5番は、この編成のために書きおろした作品としては唯一の3楽章構成だが、規模の大きい中間楽章が存在感を示し、愛称の「幽霊」もこの楽章の曲想に由来している。

ブラームス(キルヒナー 編曲)：弦楽六重奏曲第1番 変ロ長調 作品18

弦楽六重奏曲は、前例もあるとはいえ、実質的にはブラームスが確立したジャンルと言って良い。作品18（1859～60）と36（1864～65）の2作品を残したが、いずれも弦楽三重奏を倍にした編成で、40分近くにも及ぶ大作である。第1番の第1楽章は、冒頭でチェロが奏でる伸びやかな旋律が印象深い。第2楽章の古風な変奏、第3楽章の軽やかで短いスケルツォを挟み、冒頭動機が第1楽章と親和性の高い第4楽章で締めくくられる。ピアノ三重奏への編曲は、より一般的な編成で作品の普及を企図したものと考えられ、編曲依頼も出版社ジムロックが行っている。ブラームスは、かねてからテオドール・キルヒナー（1823～1903）の編曲の才能を手放して評価しており、1883年に出版された二つの弦楽六重奏曲の編曲にも大満足だったという。